

禅の友

Zen no Tomo

12

December 2019

特集 成道会





ご本山だより 大本山永平寺 【大根漬け】

大本山永平寺 ☎〇七七六・六三・三一〇二



永平寺での大根漬けの様子

極月ごくげつの永平寺は、無量の雪に護られ、まるで山と寺とが一つになったようです。

ご開山道元禅師さまは、次のようなお歌を詠まれております。

夏冬のさかひもわかぬ越のやま降る白雪もなる雷も

季節は刻々と移り変わり、ここからが夏で、ここからが冬ですということはありません。この天地自然は、まさに生きている命そのものであり、知らず知らずのうちに季節は移ろいゆくものです。毎朝洗面の際、鏡に映る自分の顔は、昨日と大して変わらない様に思いますが、五年・十年と時を重ね、ふと気づけばシワが増えていたりします。私たちは、自分では止めることも戻すこともできない而今を生きています。継ぎ目はなく、その時その時がすべてです。

その様な中で、それぞれに自己もあれば他己もある世の中ですが、ひとた

び見方を変えてみれば、皆さまお一人お一人が、継ぎ目のないほとけさまのお命そのものなのです。

さて、永平寺では、食事の度に少しの漬物をいただきます。そのほとんどは、典座寮てんざせう（寺のハシリを修行道場とする部署）の修行僧が漬けた大根漬けです。人が二人程入る大きな樽の中に、沢山の太根が次々と隙間なく詰められ、漬物小屋にいくつも並んでゆきます。

天地の恵みは、多くの方々の手間暇を受けて野菜となり、そして刻々と移ろいゆくほとけのお命をいただいて大根は漬物となります。その漬物は、修行僧の托鉢の草鞋を編む手となり、供養の読経をする声となります。もちろん野菜は野菜、修行僧は修行僧ですが、皆がその時その時、ほとけのお命そのものなのです。

南無釈迦牟尼仏 南無釈迦牟尼仏



ご本山だより

大本山總持寺

ねんきゆうさいじん
【年窮歳盡のとき】

大本山總持寺 ☎ 〇四五・五八一・六〇二一



まもなく一年が終わろうとしていますが、日本列島は今年も台風などによる大きな災害に見舞われました。来年こそは災害の起こらないよう平穏な年となりますよう祈るばかりです。さて、十二月はとても大切な月です。八日に釈尊成道会しやくそんじやうどうえがあり、それに先んじて一日より八日未明まで臘八摂心ろうはちせつしんが修行されます。

摂心とは、心を静かにおさめて坐禅三昧に徹することです。

瑩山けいざん禅師は『伝光録』の中で「参禅は道心ある是れ初めなり」とお示します。道心という言葉は「決心」とか「志」の意で、何かを行うとき強い心や決心がなければ道半ばになってしまうということです。この道心を持ち続けることが修行において最も大切であり、臘八摂心に求められることなのです。

臘八摂心は、お釈迦さまが成道なさる前に七日間不眠不休の坐禅をされたことを慕って行われるもので、總持寺では日常の諸行持を休止し食事と提唱（講義）のとき以外は午前三時から午後九時まで僧堂で坐禅に打ち込みます。

とくに最終日七日目は深夜まで坐禅を続けます。また坐禅中に疑問など生じたら後堂老師や単頭老師の部屋に赴き、これを問う時間もあります。摂心が終わる八日未明には「成道会けんどうえ 粥じやく諷ふう經きやう」が行われます。

臘八摂心は、總持寺開祖・瑩山しんぎ禅師さまの『瑩山清規』によって、「臘月の長坐」として全国に広まっていた経緯がありますので、殊に大切に修行いたしたいと思います。

選・坊城俊樹

銀漢の細波打てる夜空かな

奈良県 竹村 和成

評

「銀漢」は天の川のこと。かなり古い言い方で、一〇〇〇年くらい前の文書にもある。我々の住む銀河系の一部であり、それを「細波」というミクロの視線で表現したところに、俳味を感じるのである。

観音の千手に自在蜘蛛の網

愛知県 大竹 妙子

評

千手観音はとても位の高い観音と聞く。その御手に巣をかける蜘蛛とはたいそう不屈き者である。しかし、観音さまはそれをお許しになつておられるのだろう。「自在」という措辞に蜘蛛の命のしたたかさを感じた。

◆ アンダンテカンタービレの秋思かな

静岡県 石濱 徹

◆ 地藏盆辻の灯は爺婆で

大阪府 岡 恭介

◆ 蛇口全開ごろごろ洗ふ走り落

東京都 友野 瞳

◆ 毒舌のまあるくなりぬ零余子飯

長野県 森山 昌子

◆ この町に湯屋の煙突鳥渡る

東京都 長谷川 瞳

◆ べつとりと残暑はりつく鉄路かな

大阪府 花谷 広文

◆ 海遠く薄に座せる十字佛

広島県 大出 豊子

◆ 理髪屋の鏡のなかに秋みつけ

神奈川県 堀田 耕一

◆ 満月を雲のなでゆく大通り

静岡県 池谷 硬司

◆ 孫の描く案山子はどれもピカソ調

京都府 藤原 昭孚

選者吟

月今宵姫とは帰らねばならぬ

俊樹

作句小見

「月今宵」は名月のこと。満月の夜にはかぐや姫は月の世界に帰らなければならない。むろん、人間世界の句として通用するが、ここは遊び心の俳諧味の作品としてご容赦いただけたらと思う。

選・長澤ちづ

新しきクレパスの箱開くごと百日草の群
れの明るさ

岐阜県 後藤 進

評 キク科の花、百日草は開花時期がその名の
とおり長く品種も多い。赤・緋・黄と様々の色
の花が咲く様子はクレパスの箱を引っ繰り返
したように華やかだ。一首の入り方も収め方
も重すぎず内容に相応しい。

水中の石の色した少女らと始発で合ひぬ
九月はじまる

大阪府 大喜多 秀起

評 新学期の九月の電車で出会う少女たちは学生
服だろうから清楚だが彩りはない。その無彩
色を、水中の石の色と喻えてユニークだ。水
中で屈折した光を反す瑞々しい石の色だ。

◆ 鯉節のむすびを握り籠りしが茶が欲しくなりうすらぐ怒り
静岡県 杉原 民子

◆ 教科書を塗り潰したる体験は自己否定した戦後の始まり
鳥取県 山本 浩一

◆ 大津波の犠牲となりし友の土地も他人に渡り重機の掻き握る
岩手県 阿部 照子

◆ 古傷をうずかせている十月の雨、消えかけた言葉の欠片
青森県 中田 瑞穂

◆ 植木鉢一つひとつを洗い終え棚に並べて友は逝きたり
三重県 西村 廣視

◆ 水しぶきに涼を求めて近寄れば葉ずれさわさわ乾く滝壺
山形県 斉藤 弥生

◆ 「振り出しにまた戻っちゃう」と君が泣く励ます言葉を我は
もたずに
秋田県 小松 紀子

◆ 風に揺れる黄金稲田の初食らう雀らしばし宙にとどまる
岩手県 穴戸 さとる

◆ 稲の香の沁みる野良着に秋の風子等に送るや越光の荷
新潟県 星野 三興

◆ 父が植ゑ夫が守りし庭木々に囲まれて今われひとり生く
茨城県 田口 昭子

選者誌

向日葵は敗荷のごとく茎折れぬ台風一過の都会の隅に
ちづ

作歌小見

杉原さん、深刻な怒りではなくほっとしました。西村さ
ん、命の終え方のお手本の一つを示された歌。このようにありたい
との思いをさりげなく伝える一首。小松さん、励ます言葉がなくとも
「泣く君」は作者の存在に救われています。